

日蓮大聖人御書全集

けんりつしょういしょう

顕立正意抄

新版
638
〜
640

顕立正意抄

ぶんえい ねん ぶんえい ねん

文永11年(74) 12月15日 53歳

にちれん い しょうかがんねんたいさいひのとみはちがつにじゅうさんにち おおじしん

日蓮、去ぬる正嘉元年太歳丁巳八月二十三日の大地震を

み かんが さだ か りつしょうあんこくろん い

見て、これを勘え定めて書ける立正安国論に云わく

やくしきよう しちなん うち ごなん お になん のこ

「薬師経の七難の内、五難たちまち起こり、二難なお残れ

たこくしんぴつ なん じかいほんぎやく なん だいじつきよう

り。いわゆる他国侵逼の難・自界叛逆の難なり。大集経の

さんさい うち にさいはや あらわ いっさい お

三災の内、一災早く顕れ、一災いまだ起こらず。いわゆる

ひようかく わざわい こんこうみようきよう うち しゅじゆ さいかいちいち お

兵革の災なり。金光明経の内の種々の災禍一々起こる

たほう おんぞくこくない しんりやく さい あらわ

といえども、他方の怨賊国内を侵掠する、この災いまだ露

れず、この難なんいまだ来きたらず。仁王経にんのうきようの七難しちなんの内うち、六難ろくなん今盛いまさか

んにして、一難いちなんいまだ現げんぜず。いわゆる、四方しほうの賊ぞく来きたつて国くに

を侵おかすの難なんなり。しかのみならず、『国土こくど乱れん時ときはまず

鬼神きじん乱みだる。鬼神きじん乱みだるるが故ゆえに万民ばんみん乱みだる』と。今いまこの文もんに就つい

てつぶさに事ことの情こころを案あんずるに、百鬼ひゃつきはや早く乱みだれ、万民ばんみん多く亡ほろ

ぶ。先難せんなんこれ明あきらかなり、後災こうさい何なんぞ疑うたがわん。もし残のこるとこ

ろの難なん、悪法あくほうの科とがによつて並び起おこり競きそい来きたらば、その時ときい

かんがせんや。帝王ていおうは国家こつかを基もととして天下てんかを治おさめ、人臣じんしんは

田園でんえんを領りようして世上せじようを保たもつ。しかるに、他方たほうの賊ぞく来きたつてこの

くに しんぷく じかいほんぎやく ち りやくりよう おどろ

国を侵逼し、自界叛逆してこの地を掠領せば、あに驚か

さわ くに うしな いえ ほろ

ざらんや、あに騒がざらんや。国を失い家を滅ぼさば、い

ところ よ のが どううんぬん いじよう りつしようあんこくろん ことば

ずれの所にか世を遁れん」等云々へ已上、立正安国論の言

なり」。

いま にちれんかき しる い だいかくせそんしる のたま

今、日蓮重ねて記して云わく、大覚世尊記して云わく

くとかげどう なのかあ し のち じきとき

「『苦得外道は、七日有つて死すべし。死して後、食吐鬼に

う くとかげどうい なのか うち し

生まれん』。苦得外道言わく『七日の内には死すべからず。

われ らかん え が きどう う どううんぬん せんばじよう

我、羅漢を得ん。餓鬼道には生まれじ』と」等云々。瞻婆城

ちようじや つまかいにん ろくしげどうい によし う ほとけ

の長者の婦懐妊す。六師外道云わく「女子に生まれん」。仏

しる のたま なんし う どううんぬん ほとけしる い

記して云わく「男子に生まれん」等云々。 仏記して云わ

さ のちみつぎ われ まさ はつねはん どううんぬん

く「却つて後三月あつて、我は当に般涅槃すべし」等云々。

いつさい げどうい もうご どううんぬん ぶつき

一切の外道云わく「これ妄語なり」等云々。 仏記のごとく、

にがつじゆうごにち はんねはん たま

二月十五日に般涅槃し給えり。

ほけきよう だいに い しゃりほつ なんじ みらいせ

法華經の第二に云わく「舍利弗よ。 汝は未来世において、

むりようむへんふかしぎこう す ないしまさ さぶつ う

無量無辺不可思議劫を過ぎて乃至当に作仏することを得べ

な けこうによらい い どううんぬん だいさん まき い

し。 号づけて華光如来と曰わん」等云々。 また第三の巻に云

わ でし まかかしよう みらいせ まさ

わく「我がこの弟子・摩訶迦葉は、 未来世において、 当に

さんびやくまんおく ぶごん う ないしさいごしん

三百万億を奉觀することを得べし乃至最後身において、

じょう ほとけ

成じて仏となることを得ん。名づけて光明如来と曰わん

え な こうみやうによらい い

とううんぬん

だいし まき い によらいめつど のち

等云々。また第四の巻に云わく「また如来滅度するの後に、

ひとあ みようほけきよう ないしいちげいつく き いちねん

もし人有って妙法華経の乃至一偈一句を聞いて、一念も

ずいき われ あのくたらさんみやくさんぼだい き さず

随喜せば、我はまたために阿耨多羅三藐三菩提の記を授く

とううんぬん

等云々。

きようもん ほとけみらいせ こと しる かみ あ

これらの経文は、仏未来世の事を記したもう。上に挙ぐ

くどくげどうとう さんじふごう たれ ぶつご しん

るところの苦得外道等の三事符合せずんば、誰か仏語を信

たほうぶつししようみよう くわ ふんじん しょぶつちようぜつ ほんてん

ぜん。たとい多宝仏証明を加え、分身の諸仏長舌を梵天

つ たも しんよう がた

に付け給うとも、信用し難きか。

いま

にちれん ふるな べん え

今またもつてかくのごとし。たとい日蓮、富楼那の弁を得

もくれん つう げん

かんが

あ

たれ

て、目連の通を現ずとも、勘うるところ当たらずんば、誰

しん

い

ぶんえいごねん

もうここく

ちようじようわ

ちよう

かこれを信ぜん。去ぬる文永五年に蒙古国の牒状我が朝

とらい

けんじんあ

あや

に渡来するところ、賢人有らばこれを怪しむべし。たとい

しん

い

ぶんえいはちねんくがつじゆうにちごかんき

こうむ

それを信ぜずとも、去ぬる文永八年九月十二日御勘気を蒙

ときは

ごうごん

つぎ

としにがつじゆういちにち

ふごう

りしの時吐くところの強言、次の年二月十一日に符合せし

こころあ

もの

しん

ことし

む。情有らん者はこれを信ずべし。いかにいわんや、今年

すで

か こくさいひよう

うえ

にかこく

うば

と

ぼくせき

既に彼の国災兵の上、二箇国を奪い取る。たとい木石たり

きんじゆう

かん

おどろ

といえども、たとい禽獣たりといえども、感ずべく驚く

べし。ひとえに只事ただごとにあらず。天魔てんまの国くにに入いつて、酔よえる
がごとく、狂くるえるがごとし。歎なげくべし、哀あわれむべし、恐おそる
べし、厭いとうべし。

また立正安国論りっしょうあんこくろんに云いわく「もし執心しゅうしん翻ひるがえ
ならず、また曲意きよくい

なお存そんせば、早はやく有為ういの郷さとを辞じして必かならず無間むけんの獄ごくに墮おちな

ん」等云々とううんぬん。今いま符合ふごうするをもつて未来みらいを案あんずるに、日本国にほんこくの

上下万人じょううげばんにん、阿鼻大城あびだいじょうに墮おちんこと、大地だいちを的まととなすがごと

し。

これらはしばらくこれを置おく。日蓮にちれんが弟子等でしとう、またこの

だいなんのが がた か ふきようきようき しゆ げんしん しんぷくずいじゆう

大難脱れ難きか。彼の不輕輕毀の衆は、現身に信伏随従の

しじ くわ せんぼう つよ あび

四字を加うれども、なお先謗の強きによつて、まず阿鼻

だいじよう お せんごう きようりやく だいくのう う いま にちれん

大城に堕ちて千劫を経歴して大苦悩を受く。今、日蓮が

で しとう しん ふく

弟子等もまたかくのごとし。あるいは信じ、あるいは伏し、

したが したが な

あるいは随い、あるいは従えども、ただ名のみこれを仮り

しんちゆう そ しんじんうす もの せんごう へ

て心中に染まざる信心薄き者は、たとい千劫をば経ずとも、

いちむけん にむけん ないしじゆうひやくむけんうたが

あるいは一無間、あるいは二無間、乃至十百無間疑いな

からんものか。

まぬか ほつ おのおのやくおう ぎようぼう ひじ

これを免れんと欲せば、各薬王・楽法のごとく、臂を

や かわ は せつせん こくおうとう
焼き、皮を剥ぎ、雪山・国王等のごとく、身みを投なげ、心こころを
つか ごたい ち な へんしん あせ なが
仕えよ。もししからずんば、五体を地に投げ、遍身に汗を流
せ。もししからずんば、珍ちんぽう宝をもつて仏前ぶつぜんに積つめ。もしし
からずんば、奴ぬひ婢となつて持者じしやに奉つかえよ。もししからずん
ば等云々。四とううんぬん悉ししつだん檀をもつて時ときに適かなうのみ。我わが弟子等でしとうの中なかに
も信心しんじん薄うす淡ものき者りんじゆうは、臨終ときの時あびごく、阿鼻そう獄げんの相げんを現げんずべし。そ
の時とき、我われを恨うらむべからず等云々。とううんぬん

ぶんえいじゆういちねんたいさいきのえいぬじゆうにがつじゆうごにち にちれん しる
文永十一年太歳甲戌十二月十五日 日蓮これを記す。